

『ローマ人の物語』から見る中日文化交流の叡智

西安培華学院 国際教育学院

王姫坤

広大な東アジア文明史の中で、中国と日本の交流は、絶え間なく流れ続ける大河のような存在である。そこには思想、技術、文化の種子が運ばれ、互いの土地に根を下ろし、やがて絢爛たる文明の花を咲かせてきた。私が選んだ書物は、中日関係を直接論じた専門書ではなく、日本の作家・塩野七生による大著『ローマ人の物語』である。本書は、東洋的視点から西洋古典文明の興亡を描き出した作品であり、その行間に込められた叡智は、文化交流の本質を理解するうえで、さらには中日関係の未来を考えるうえで、きわめて深く示唆に富んだ視座を与えてくれる。

塩野七生氏は十五年の歳月を費やし、全十五巻にわたってローマ帝国千年の歴史を描き出した。彼女は単なる史実の再叙述にとどまらず、日本人としての文化的背景と思考様式をもって、ローマがいかにして世界帝国を築き、長期にわたる繁栄を維持し得たのかを分析している。彼女の筆によれば、ローマの成功の核心は軍事的征服だけではなく、比類なき「包容と統合」の能力にあった。ローマ人が道路を築いたのは軍団の迅速な移動のためだけでなく、帝国内の異なる民族や文化を結びつけるためであった。彼らは被征服民に市民権を与え、敵を味方へと転じた。さらに、ギリシャ文化や東方の宗教を取り入れ、それらを自らの体系の中に融合させた。塩野七生が指摘するように、「ロー

マ人の天才は“体系化”する能力にある。見聞きしたものを自分たちのものにし、そこに独自の創意を加えて、堅固な体系を築き上げた」のである。

この「包容と統合」の叡智は、中国文化における「和して同ぜず」「海納百川」といった思想と通底しており、同時に中日文化交流の歴史的本質をも的確に映し出している。歴史を振り返れば、古代日本は謙虚さと情熱をもって中国大陸の先進文明を受け入れてきた。遣隋使・遣唐使は危険を顧みず海を渡り、中国の律令制度、儒家思想、仏教經典、建築技術、さらには文字体系に至るまで、体系的に日本へと導入した。しかし日本は単なる模倣に終始したのではなく、壮大な「在地化（ローカライズ）」の統合を行った。唐の律令制を基にしつつ国情に即した「律令国家」を築き、漢字を基礎として独自の仮名文字を創出し、中国仏教を土着の神道信仰と融合させて独特の宗教観を形成した。この過程は、ローマがギリシャ文化を吸収した姿と重なり、自らの必要に根ざした創造的転化によって、日本文化の独自の魅力を形づくったのである。

しかし歴史の道は常に平坦であったわけではない。近代以降、複雑な歴史的要因と国際環境の中で、中日関係は幾度も曲折と断絶を経験してきた。これは、拡張後期のローマ帝国が内部矛盾の激化やアイデンティティの危機に直面した状況にも通じる。塩野七生はローマ衰亡の分析の中で、体系が開放性と包容性を失い、硬直化し排外的になったとき、危機が生まれることを繰り返し示唆している。『ローマ人の物語』は、国家であれ文明であれ、その生命力は絶え間ない交流と自己更新にあり、異質な文化に対して自信と叡智をもって向き合えるかどうかにかかっていることを教えてくれる。

新たな時代の出発点に立つ今、引越すことのできない隣人である中日両国にとって、「包容と統合」の叡智を再確認することはとりわけ重要である。両国の文化交流は、唐代の風雅を懐かしむ郷愁にとどまるべきではなく、文学、芸術、科学技術、環境、社会治理といった未来志向の分野へと広がっていく必要がある。今日の中国の若者は、村上春樹を読むことで現代日本の都市人の精神世界に触れ、宮崎駿のアニメーションを通して自然観や平和理念を理解し、日本のごみ分別や高齢者福祉の実践から有益な経験を学ぶことができる。こうした理解の目的は「全面的な日本化」にあるのではなく、先人やローマ人が実践したように、「書を通じて日本を知る」ことで自らをより深く理解し、長所を取り入れ、新たな創意を喚起し、最終的に共に発展することにある。

『ローマ人の物語』が最終的に語りかけるのは、偉大な文明が偉大である所以は、異なる世界を結びつけ、その結びつきを自らの発展と人類共通の進歩の糧へと転化できる点にある、ということである。中日両国はいま、歴史上いかなる時代にも増して、この「つなぐ叡智」を必要としている。中国の若者である私たちは、両国の民間友好交流を未来へと導く使命を担っている。読書を通じて私たちは古今の叡智と対話し、書くことによって新しい世代の思考とビジョンを表現することができる。書を舟とし、筆を櫂として、時空を超えた対話の航海に乗り出し、歴史の叡智を汲み取りながら、平和・理解・共創の未来へと共に漕ぎ出していこう。